

dessin

素描・習作・idea sketchingの

しゅえいしゅさく

少女は生ける賢者の石であった。究竟の永遠が彼女に封ぜられていた。それを得られたならば、凡てである究竟神の栄誉を受けられると伝えられていた。異教徒のあり得ない全能の神。背教のあり得ない完全神。凡てであり、異他のない神。

男たちは死力を尽くして闘った。しかしガッデングッドは思わなかった。かつての友エクレストと闘う日が来るとは。

黒髪を振るう若きガッデングッドの太い腕は分厚く巨大な剣をも振るう。その臂力は獅子をも凌駕し、暴れ狂う象の首をもへし折った。そう彼は見上げるような巨漢だったのだ。顎は張っていて、肌は褐色だった。楯紋は赤龍だった。庶民の生まれだが、超人的な戦闘能力で男爵の地位を得ている。

比してさらに若き白髪のエクレストは長身だが、瘦身で何もかもが流麗だった。高貴なる白きマントに白い鎖帷子、白いロング・チュニック、白い脛当てに白い戦闘用編み上げサンダル、兜には牡鹿の角を左右に広げて附している。高貴な生まれだが、先祖が残虐なる侯爵で、悪魔の末裔と噂されていた。

そんな先祖の血を嫌うかのよう、気高い精神のエクレストは家を出て放浪の内に剣術を磨く。そんなときにガッデングッドに出会い、実践剣術を教わり、その騎士団に入った。

実力をつけたエクレストはめきめき腕を上げ、ガッデングッドの四天王に数えられたが、破天荒なガッデングッドの言動に疑問を抱き、聖者ンアオグの聖堂を訪れ、教理に感銘し、聖騎士団に属する。

黒髪の男爵は敢えてそれを咎めなかった。彼の騎士団はまさに衰退しようとしていたのだ。そして思う。

「俺がこいつを手放したのは正解であった。聖騎士エクレストの腕は四天王の領域を超えた。この剣はその精神精髓に於いて俺の正統な継承者と言える。」

俺は自らを実現した。俺はもはや亡ぶべき途中経過に過ぎない」

そして涙した。誰にも見られぬように。この成長を眺める親のように。

だが彼は敢えて奥義とも言える必殺の剣を繰り出す。剣は空気を裂いて燃え上がった。エクレストはどうにか受けたが、ふつ飛んだ。誰もがガッデングッドの勝利を疑わなかった。しかし全力を尽くした巨剣には隙が生じ、白い聖騎士は飛ばされた勢いのあるまま反発力に替えて、それを突こうとする。

ガッデングッドは微笑した。

エクレストのすべてが崩れた。

ンアオグは巧みに究竟永遠を得るためにエクレストに魔法をかけていたのである。

彼は目覚めた。しかし既に剣はガッデングッドを斬っている。彼は自らの喉を突いた。

誰もがそのあまりに意外な展開に口もきけなくなっていた。突然と立ちすくみ、戦闘は止まっていた。時間が停止したかのようであった。

だがそれは序章に過ぎない。

恐るべきことが起こった。

屍となったエクレストはまるで幼虫から背中を割って羽化するセミのように身を突き破っておぞましい魔物があらわれる。これこそがンアオグがかけた唾棄すべき魔法の真実であった。聖者は裏切りや敗北を予想してエクレストが怪我や死によって意識が弱まったときに、名すらも人に知られぬ暗黒世界の奥深くに住む魔物があたかもウイルスが（自ら増殖できないので）細胞に寄生して増殖するように、エクレストの身体を媒介して召喚されるように仕組んでいたのである。その名は「残虐、死、客観的な事実」であった。それは「不安、恐れ、憎しみ、嘔り、貪り」で人を支配するのだ。その姿の醜さ穢さは言語を絶する。

怪物は周囲の騎士たちを次々に噛み裂き喰らった。大恐慌となる。

「だめだ、人は魔神に勝てない」

だがガッデングッドは死の淵で聞いていた。この世から去り消え逝くエクレストの声だ。

「ガッデングッド、あなたは希望でした。どうか弱気者たち、小さき者たち、ささやかな幸福を求める人々を救いたまえ。かつて流浪の身であった自分があなたの太陽のようなプレゼンスに救われたように」

ガッデングッドは黄泉の国をゆつくりと振り返っていた。きよらかな、さやかな光の風がそちらから吹いている。

胸に剣の刺さったまま、半ば屍骸の彼は血を瀧のようにぼたぼた落として立ち上がった。

「俺は負けない。絶望はない。絶望した者に絶望など起こるはずがない。希望があるから絶望するのだ。だから俺は自分の心機を偽らない。神の與えたもうた心のまゝに」

その言葉に魂ある数名の戦士の心が甦った。

「おお、我らは何を呆けていたのか」

ゾドムが聖なる咒を唱える。

「希望こそが生きることだ」

シュラが槍のように長いレイピア（刺突剣）に聖なる息吹をかけて蒼白い炎で荘厳する。

モンゾがオーロックスさえ両断する戦斧を振り回し、雄叫ぶ。

「殺戮、略奪、復讐、怨嗟、大虐殺、悲劇、非業の死、不幸、災い、それらを止めるのだ。我は知る、神がそれを認めようとも、神は又それを断裂せんとする我らが希望も認めたもうことを。神は無際限、神は自在なりて自由、それゆえ神は凡て、されば神こそは全能」

ガッデングッドの太い剣が「残虐、死、客観的な事実」の体を深く貫く。それが胸なのか足なのか頭なのかはわからない。そのまま引き下ろし、縦裂する。聖なる青きIの文字のように。剣はそのまま深々と大地に突き刺さる。拳が地面に当たる。前屈みになったその姿は、あたかも跪いて祈る者のようであった。その口からとぎれとぎれに呟くように「この大地に永遠の平和を」という言葉が洩れた。微かに。

希望は捨てられない。

人は愛を求め、肯定されることを求めて生きる。

究竟なる永遠の少女があらわれる。光り輝き、眩い。聖なる文字が泛び、聖なる青の光で燃え上がる。

※ 萩原三至氏の『BASTARD II』十一巻 十巻にインスパイアされました。すなわちこの小説は剽窃疑惑を持たせるというコンセプトのコンセプトチュアル・アートです。